

# この音色、いつまでもいつまでも

囃子連中 北天玄武乃会

「川内ネプタの囃子を絶やすわけにはいかない。私たちの小さい頃は、うるさいって怒られながらも年がら年中笛や太鼓を鳴らしていたんですが、今の子どもたちはなかなか笛や太鼓に触れるってところが少なくなりましたよね。本番になると、雰囲気では合ってるんですが、満足にできている子がない。それで最初は囃子教室みたいな形で始めたんです。」10年前、川内ネプタの大切な囃子を未来につなげるため立ち上がった北天玄



囃子連中 北天玄武乃会  
会長 中村亮さん

武乃会会長の中村亮さん。

当初は10名で始めたこの会は、今、大人20名、子ども8名で組織され、「とにかく楽しく」をモットーに毎週稽古に励んでいます。その名の由来は「北天＝北の空」、「玄武＝中国の神話で、北を司るとされる四神のひとつ」で、まさに北の熱く燃えるネプタの夜空を守るといふ願いが込められた名前です。

「みんなネプタ囃子が好きだという点でつながっています。囃子好きが高じて、青森ネプタ祭に囃子方として参加するようになった人もいますよ。そういうウツテがつながって、私たちはいろんなところの囃子を演奏できるようにになりました。でも、ただ「真似」ではダメなので、きちんと習いについて演奏するんです。他の地域の囃子を披露するとなると下手なものはできないので、自分たちの囃子よりも稽古に熱が入ったりして。でも、川内の囃子を守り伝えていくためには、こういうのも必要なんです。基本囃子好きですから、とにかく楽しく、いろんなことにチャレンジしています。」

今では、他の地域の囃子方からも認められるようになった北天玄武乃会。異なる伝統に触れることも、自分たちの伝統の音色をきちんと感じ、守るひとつの道筋として



決めポーズは、勇壮なネプタの表情で！北天玄武乃会に興味のある方はFacebookページをご覧ください。



(上右)本番さながらに稽古に打ち込む。一糸乱れぬ音色と動きは、観る者を圧倒する。(上)伝統を受け継ぐ子どもたち。将来、川内の夏の空を守る担い手だ。(右)むつ市成人式で囃子を披露したことも。その勇壮さから、高齢者施設の夏祭りなど、年間を通して活動している。



## いつまで生きていく理由

畜産業をつなぐ 鈴木さん親子



鈴木悦雄さん

息子 鈴木博之さん・孫 爾久くん

斐川地区で畜産業を営む鈴木さん親子。親牛と仔牛あわせて100頭以上の牛を飼育し、肉牛を生産しています。

中学卒業後ふるさとを離れ、農業高校、酪農学園大学を卒業し家業を継いだ息子の博之さん。川内に戻り畜産の道を歩む決意は、父悦雄さんの姿を見て育った環境がもたらしたものでした。

「広い土地があるからできるのであって、農地をどこかに持って行けるわけでもないですから、まして、違う仕事の方が儲かるかもしれない、この子たち(牛)を見捨てるわけにもいかないでしょ。ここで親父が築いた仕事をここで頑張るしかないということなんです。」と博之さん。



仕方なく帰ってきたんだべさ。と照れ笑う悦雄さんですが、「休みもないし、管理も大変な仕事。家族だからつながってできているよなもんだ。」とも。

博之さんには、中学1年生と4歳の娘さん、1歳の息子さんがいます。「3人とも頼りにしていますよ。やる気があれば女の子だって畜産できるんですから。将来この仕事を継いでくれたらうれしいですね。」

ここで生きていく理由、それは「ここに生まれたから」。

鈴木さん親子の姿に、「このまちで変わらぬに生きていくこと」が「このまちをつなぐこと」になるといふ答えを見ました。



大畑、脇野沢、川内と3回に渡って特集した「つなぐ特集」。みなさん取材して感じたことは、今まで、このまちの産業や生活、文化や愛着を守ってきたくださった方々がたくさんいて、それを将来にわたって守っていかねければならないと奮闘している方々がいるということ。そして、少なくともたつとはいえ、未来を担う子どもたちが確実に育っているということでした。この輪を、もっともつと広げたい。

シビックプライド(市民の誇り)という言葉をお伝えしてきました。「誰かがやる」ではなく、自分もこのまちの一員だと自覚して、まちを愛して、まちをつなげようとする。

毎日の生活をふと見渡したとき、そこにはあなたにもできる、あなたにしかできない「つなげられること」があるかもしれませ



(上)斐川地区にある鈴木さんの牛舎。(下)野平地区に放牧される鈴木さんの牛たち。農業から畜産へとシフトした歴史のなかで、すべての水田を牧草に転換し「水田放牧」の先駆けとなった鈴木さんは、平成21年、全国草地畜産コンクールにおいて最優秀賞の農林水産大臣賞を受賞している。



川内マリンビーチにて